

北方四島の自然保護を考えるシンポジウム

たかはた・しげる
1935年生まれ
東京農工大学農学部卒業後、
農林水産省研究機関に36年間
勤務。専門は草原生態学、元
日本生態学会自然保護専門委
員、北海道自然保護協合理事、
北方四島の自然保護を考える
会代表

高 畑 滋

東京と札幌で行われた北方四島の自然保護を考えるシンポジウムの内容を報告し、この地域の自然を良く知り、自然保護を考えることが、北海道の自然保護運動にとっても重要であることを述べる。

本文のねらい・要点

一九九九年九月二十八日東京・国連大学と十一月二十日に札幌で「北方四島の自然保護を考えるシンポジウム」が開催されました。東京では会場に入り切れない程の参加者があり、一ヶ月間の会期の北方四島の自然写真展と合わせて、国連大学環境パートナーシッププラザの催しらしい企画だと好評でした。札幌ではサハリン・ユジノサハリンスク、動物相情報研究センター・ウラジミール・ジーコフさんの出席をえて盛会でした。

目的と経過

北海道自然保護協会は一九九一年五月二十日に「北方領土の自然環境総合調査実施と自然環境保全施策を定める要望書」を政府及び道知事、ソ連大使宛てに提出しています。これは、丁度ゴルバチョフ大統領の来日に伴って発表された「日・ソ共同声明」で北方領土問題が新たな段階に入った時でした。この要望書の中で、北方四島の自然は北海道との関係で極めて貴重であり、環境保全・資源保護を大前提とした経済協力を日・ソ双方で確認することを求めています。さらに、自然環境の総合調査と保護地域の設定を提言しています。また、土地所有権を始め各種私権が回復しても、この土地の自然は公共資源として大事に保護され

るべきであると宣言しています。

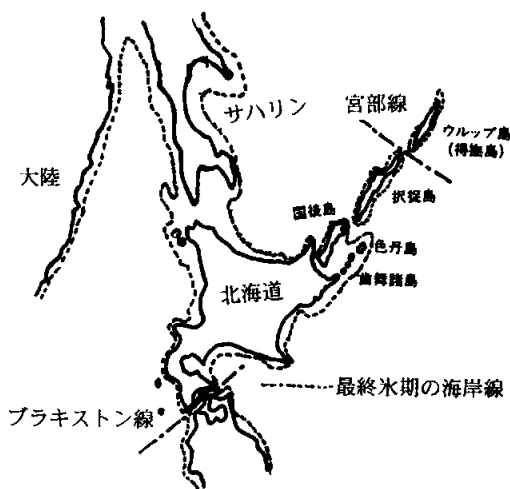
エリツイン大統領は日ロ首脳会談で、日ロ平和条約を積極的にすすめる事を表明して、北方領土問題は再び注目されるようになりました。北海道自然保護協会は一九九九年一月二十日に再度同じ要望書を、新しい情勢に合わせて提出しました。ここでは国境画定委員会や共同経済活動委員会に環境保全・資源保護を大前提とすることを申し入れていきます。この要望書はマスコミでも取り上げられ、参議院でIUCN(世界自然保護連合)北東アジア地域理事本舘議員の質問で関係大臣から、要望書に沿う活動をしていきたいとの答弁を得ています。私達はこのような活動の経過を経て、さらに市民運動として輪を広げるために、北方四島地域の自然を科学的に解説し、自然保護の大事な事を訴えるシンポジウムを開くことを計画しました。シンポジウムのコンセプトを「この地域の自然を一般市民向けに解説し、開発を考える前に自然をどう守るかを考える」としました。市民向けに自然を解説するのは経験豊かな専門家であれば出来ないもので、趣旨に賛同して協力してくれる各分野の研究者にお願いすることになりました。幸い一九九九年夏に国後島と択捉島にビザなし専門家交流で行かれた研究者の方達が講師を引き受けてくれ、最新の調査報告ともなりました。

内 容

国後島爺爺岳調査団長の勝井義雄北大名誉教授は東京シンポで「千島列島孤の成立と地史」と題して千島列島の成り立ちからお話を頂きました。千島の自然を解説するには、まず千島がどのような島であるのが基本になります。千島列島は

環太平洋における典型的な島弧の一つで、太平洋プレートとの潜り込みによって生じた海溝、活発な地震・火山帯などが一、二〇〇km以上にわたって円弧状に連なっています。南西部では知床半島、国後島、択捉島、ウルップ島など、火山をもつ島々が雁行配列し、その外側に根室半島、歯舞諸島、色丹島などの非火山列島が連なります。今年夏、日・露で共同調査した国後島爺爺岳火山の現状を紹介され、一九七三年に噴火した爺爺岳の火山活動を科学的に調査するには、自然の状態で保存されていなければならぬことを強調されました。火山学者から見た自然保護ですが、このことが北海道ともつながる火山帯の活動を予測し、災害防止につながることとなります。今度の調査で測定器を設置し不断の調査継続が期待されるようになりました。日ロ共同で世界で最も火山活動が活発な地域の一つである千島列島の観測と解析が進むことが期待されます。

自然は生命の誕生以来の歴史をもっていますが、現在の自然に深くかかわりあいのある最終氷期(十一―二万年)以降の地史が自然環境の基礎として大事です。幸い花粉分析によって、北方地域の古生態を研究しておられる五十嵐八枝子さんが、シンポジウムの趣旨を理解して「北方四島の地史的生態的意義―北海道とのつながりについて―」という演題で基本的な解説をしてくれることになりました。「北海道の自然史―氷期の森林を旅する―」(小野有五氏と共著、北大図書刊行会一九九一)で一般読者向けに分かり易く自然史を解説しておられる五十嵐さんは、科学的に北方四島と北海道との関係を示されました。



東京シンポでは高橋英樹北大総合博物館教授から「千島列島の植物相―研究史と国際共同調査」と二つ講演を頂きました。高橋さんは北方系植物の分類と生態を研究されていますが、一九九一―九七年にアメリカ、ロシア、日本三カ国の研究者による国際千島列島調査(IKIP)に参加され、千島列島の植物相を調査し、種多様性の定量的解析による植物種移動の解析をされています。北海道東部とカムチャッカ半島を結ぶ千島列島は、植物移動のルートになったと考えられ、北日本植物相の成立史を解きあかす上で、大変興味深い地域です。千島列島主要な島の植物相の概略は明らかになっていますが、列島の中には植物調査が未報告の島もあり(例えば、マカンス島、エカルマ島などの中部千島と、志発島以外の歯舞諸島)、

列島に沿っての島単位での植物相の比較をするには未だ不完全で、今後これらの地域を精査する必要があります。

氷河期以降の生物分布の変遷史の後に、現存植生の解説がありました。一九九九年夏に国後島を訪問した植物学の佐藤謙さんが「国後島・爺爺岳の植生」と題して、最新の調査報告をしました。爺爺岳は一九七三年に噴火しましたが、自然保護区であるため人工的な植生回復工事等はおらず、全くの自然の状態での植生遷移が観察されることとなっています。一九九九年踏査ルートの爺爺岳南東海岸から山頂までに約一七〇種の維管束植物を確認しました。これらは館脇(一九五八)によって調査された宮部線以南の汎針広混交林帯の特徴を示しています。調査ルート上では帰化植物が全く見られませんでした。火山噴火後の初期植物遷移を観察するには、自然が保護され人為的影響が少ないことが重要であることがわかりました。

海鳥類の専門家である小城春雄北大水産学部教授からは「沿岸生物保護と漁業の関係」と題して、海鳥保護のためには、流し網や定置網のような漁法を規制する必要があることが示されました。会場では漁網を広げて見せて、海中では霞網の様に見えること、クジラや潜水艦まで掛かってしまう事を示されました。海鳥類の保護の為に、海洋性食物連鎖上イカナゴのようなプランクトン食性魚類の稚魚資源生管理が必要ですが、実際にはイカナゴを追ってホッケや海鳥が集まり、これらを餌とする海獣類が集まると云うように漁網による混獲が避けられません。海鳥・海獣類の繁殖期には魚網禁止とか餌魚類の漁獲制限などが必要だ

と思われます。

和田一雄野生物保護学会会長は「鱒脚(ききゃく)類の現状と海洋生物圏保全」というテーマで、人間活動がアザラシ、オットセイ、トド、ラッコなど食物連鎖上位の海獣類の生息を脅かしている様子を、データを基に示されました。トドはサハリン周辺と千島列島で繁殖したものが北海道に回遊してきます。日本海側は利尻・礼文や積丹半島太平洋側は襟裳岬から噴火湾にまで回遊します。北海道ではトドは漁業被害防除として駆除されます。一九六一―九二年の三十二年間に二、四八八頭駆除したことになり、千島海域の推定環境収容力十萬頭から見れば過大な駆除数で、北海道でのトド駆除が千島海域のトド現存数を五、〇〇〇頭前後まで減少させた原因の一つと見ることが出来ます。海獣類の回遊ルートであるクリル・アリュート海洋生物圏構想をロシア、アメリカ、日本ですすめる必要を話されました。

サハリンから参加したウラジミール・ジーコフさんは鳥の研究者で、「極東と北海道の渡り鳥とその保護」という題でロシア語で講演され根室市の不破理江さんが通訳しました。この地域の渡り鳥の生息は日本とロシアの研究者の協同によって次第に解明されるようになっており、北方四島は重要な渡りの中継地となっていることが示されました。海鳥保護上の問題点としては、ロシア、日本双方の漁船による羅網死亡が多いことで、千島沖海域で操業していたロシア漁船六艘に同乗して研究者が集めたデータでは深刻な状況でした。この海域では八十艘の日本漁船が操業しています。で、日本側でもデータを取るように希望します。サハリン沖で石油開発が進んでいます、この地

域はオオアシシギ、コシジロアジサシ、オオワシなどのコロニーがあるところ。すでに二回も石油流出事故が起きていて、希少種の生息地に近いので問題でした。生息地に近い海岸で石油汚染が起きると回復不可能な被害が生じます。国後島の金鉱開発は州知事が州の保護区を解除して許可しました。この地域とつながりのあるアラスカ州知事や北海道知事がサハリン州知事に保護区を解除しないように意見を云うのは効果があると思います。さらに国際的に世論を高めて、世界遺産のような国際保護区にした方が保全しやすいと思います。日本の皆さんのご協力をお願いします。

パネルディスカッションでは基調報告として、近藤憲久さんが「北方四島自然保護の現状と問題点」と題して、これまでの自然の解説を受けて現状と自然保護上の問題点を提起しました。続いて、依造三さんをコーディネータとして各講師からの自然保護の提言と会場からの意見・討議がおこなわれました。

自然保護運動上の意義

自然保護関係者には、遠い北方領域の自然保護より、身近な自然保護を考えるべきではないかと云う意見が多くありました。北方四島は決して遠い所ではありません。生物地理的には北海道東部と同じに見られています。動物たちは自由に北海道との間を往来しています。この地域の自然を良く知り、自然保護を考えることは、北海道の自然保護にとっても重要な意義をもっています。北海道では失われてしまった自然が、まだこの地域では守られています、最近いろいろな自然保護上の問題点がでていけるところです。これも北海道と

の関係が深いものです。これからも、この地域の自然を守ることが北海道の自然を守ることになると思しますので、一層のご理解とご協力をお願いいたします。



二〇〇〇年一月二十二日根室市で「北方四島の自然」シンポジウム(北方四島自然問題協議会主催)が開かれ、サハリン州環境保護委員長オニシェンコさんが出席され、南クリルの自然保護の現状と問題点を訴え、会場を埋めた二二〇名の根室市民の共感を得ました。